

チャレンジする Someone NEWS

~挑戦者の履歴書

第5回

エバレット・ブラウン氏

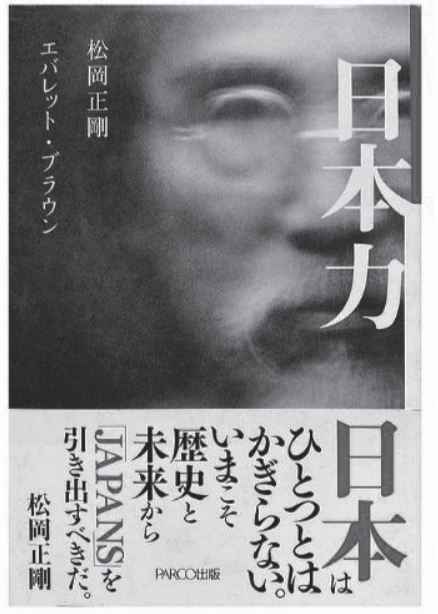
(ラオトジャーナリスト・写真家)

——ファインダーを通して日本を視る

一般社団法人 洗楓座 代表理事 佐藤建吉

その施設は、エバレット・ブラウンが、マクロビオティック料理研究家の中島アコと共同で、2000年にオープンした農園カフェ&宿泊施設、そしてアグリカルチャースクールでもある。

『日本力』の表紙



は、松岡正剛とエバレット・ブラウンの共著で、二人の対話で構成されている。その中に「パソコ」では追いついていない「JAPANS」を引き出すべきだ。松岡正剛

湿板撮影が発展している。2017年6月、東京の南青山のスパイラルホールで、エバレットの写真展が開催された。『JAPANESE SAMURAI FLASH』というテーマで、二人の対話の感想を表現する仕事の旅路に『日本力』を発行している。そのために、成果と共感を世界に発信している。そのために、成果と共感を世界に発信している。

なっていることにも気付く。それは、命を懸けてファインダーを通して日本人と日本を永遠に残す仕事をしている。信念とも思える挑戦である。コロナ禍の2020年においても、エバレットは、日本人には気づかないガイジンとしての感性から、日本の伝統と歴史

出会いと注目

コロナ禍で社会が沈黙化しているなか、今年も春が来た。東京では桜も散り始めた。この原稿は、筆者の暮らす千葉県JR外房線の電車の中で書き始めた。向かいの座席には、制服を着た女子高生が二人。その隣には中年の小母さん。その隣にも別の高校女子高生が二人。二

はエバレットの活動や視点が重なる面がある。エバレットは日本やロビオティックに特化し、コーヒーも紅茶も無農薬由来である。皿やカップも施設内の陶芸窯で焼かれたもの。手元に当時の本がある。『房総LIFE』(2009年春号)で、「風が駆け抜ける小さな村 中島アコとエバレットさんの家」を紹介されている。

▼ブラウンスフィールド

前述のように、筆者はエバレットと同様に、JR外房線の岬町に住んでいる。海に面し、川が流れる、里山がある。その地は、かつては別荘地でもあった。森鷗外、林芙美子、宮本百合子なども訪ねた。小説にも著わされている。また実業家の梅屋吉の別荘もあり、蒋介石もVIPの来訪し、石碑も残されている。また、著名な大学やビジネススマンなどのガイジンも住んでいる。

湿板撮影による松岡正剛氏

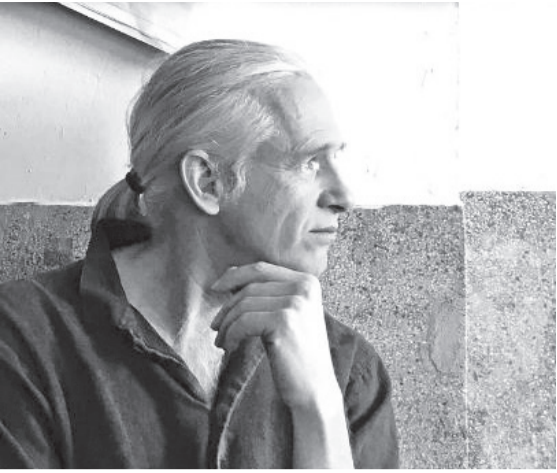


性が維持されている。その背景には、エバレット・ブラウンと中島アコの二人の外部発信力がエフェクトしている。筆者は、二人の活動の様子を、千葉大学の学生にも知ってもらおうと、担当していた一般教養科目の「地域活性化システム論」で、『食と農、そして健康』として講義して頂いた。2010年1月のことである。

▼エバレットの挑戦

エバレット・ケネディは、編集工学を提唱して出版事業をしている松岡正剛氏も共鳴した。京都の国際会議のカメラマンに惚れたのだった。その結果、日本文化を二人が語る本として『日本力』が完成した。同書は、松岡正剛とエバレット・ブラウンの共著で、二人の対話で構成されている。その中に「パソコ」では追いついていない「JAPANS」を引き出すべきだ。松岡正剛

エバレット・ブラウン氏



人組は語りあい、一人の小母さんはケータイをじっと読んでいた。またまた乗り合わせたこの5人は、日本人のなかでも、日本の標準や常識を気にする人たちかもしれない。本稿で取り上げるエバレットは、アメリカに心を馳せてはいないかもしれないが、筆者は旋回する灯台の光が、なにか生きる導きを与えてくれるのではと、30年ほど前にこの地に引越してきた。

エバレットは、アメリカの大学を卒業して間もなく日本にやってきた。それには、逸話がある。エバレットは、アメリカの大学を卒業して間もなく日本にやってきた。それには、逸話がある。

エバレットは、古民家の料を残し宿泊&厨房とした「慈悲の邸」(じじのいえ)を詳しく案内してくれた。彼の澄み通った眼差しは、自然との調和、古民家の持つ落ち着きある雰囲気、なお現代に活かしている。それは、地元の職人たちの協力(ボランティア)で造られたものであるという、その人たちの情感が込められている。

エバレットの写真に、松岡正剛氏も共鳴した。京都の国際会議のカメラマンに惚れたのだった。その結果、日本文化を二人が語る本として『日本力』が完成した。同書は、松岡正剛とエバレット・ブラウンの共著で、二人の対話で構成されている。その中に「パソコ」では追いついていない「JAPANS」を引き出すべきだ。松岡正剛

▼「ガイジン」による日本の観察

この映画の様なストーリーが、その後の彼の日本滞在を脚色した。エバレットの以前に、いわゆるガイジンが日本を訪ね、旅し住み、その目を通して観察し、自国はじめ諸

こうした多面的な切り

エバレット・ケネディは、編集工学を提唱して出版事業をしている松岡正剛氏も共鳴した。京都の国際会議のカメラマンに惚れたのだった。その結果、日本文化を二人が語る本として『日本力』が完成した。同書は、松岡正剛とエバレット・ブラウンの共著で、二人の対話で構成されている。その中に「パソコ」では追いついていない「JAPANS」を引き出すべきだ。松岡正剛

エバレットの写真に、松岡正剛氏も共鳴した。京都の国際会議のカメラマンに惚れたのだった。その結果、日本文化を二人が語る本として『日本力』が完成した。同書は、松岡正剛とエバレット・ブラウンの共著で、二人の対話で構成されている。その中に「パソコ」では追いついていない「JAPANS」を引き出すべきだ。松岡正剛

- ①日本の「農的な暮らし」を体験して欲しい https://shun-gate.com/curator/curator\_10.html
②エバレット・ケネディの写真を、はじめニューラルホルで展示になったという。それは、日 https://www.everetteknedybrown.kyoto/
③書籍出版 https://www.everetteknedybrown.kyoto/
④よく写真作品は、以下のHPの「ARTWORK」で観察することが出来る。 https://www.everetteknedybrown.kyoto/
⑤オープン・マインド・オブ・ラファディオ・ハーン in USA - 日米基層文化の邂逅 https://hearn2019.yakumokai.org/ja/everett-brown